

## 林房雄における 1930 年代の浪漫主義的転回

—— 小説『青年』前後 ——

山 崎 義 光

The Romantic Turn of Fusao Hayashi in the 1930s:  
Before and after the novel "SEINEN"

YAMAZAKI, Yoshimitsu

## Abstract

Fusao Hayashi (1903-75) was a writer of Proletarian literature. However, in the 1930s, he transformed a view of society, instead of Marxian class theory, recognizing the fact that the modernization of Japan originated in the imperialist hegemonic conflict with the West. In the controversy on the Art Popularization, Hayashi insisted on creating works to be read by the public readers, but the opinion was criticized. After coming out of prison in 1932, Hayashi presented essays on the mission of Literary persons, and published the novel "SEINEN". Takiji Kobayashi criticized the views of Hayashi from the standpoint of Proletarian school. "SEINEN" was the story of young men in Choshu Domain who idealized *Kaikoku* at the end of the Tokugawa period. These young men were portrayed as persons who find the ideal in relation to the reality rather than the absolute correctness. After that, Hayashi began to publish serially the novel "SAIGO TAKAMORI". On that extension, he drew the social ideal of *Koa* in his essays and novels set in Manchuria. In the 1930s, crises such as economic depression, political unrest and global warfare appeared. Under such circumstances, in response to the desire of the times, Fusao Hayashi expressed the social image and the logic for justifying Modern Japan.

**キーワード**：林房雄, 『青年』, 1930 年代, マルクス主義, 日本近代史

**Key Words** : Fusao Hayashi, "SEINEN", 1930s, Marxism, Modern Japanese history

## 1. はじめに

林房雄(1903-75)は1960年代に『大東亜戦争肯定論』を発表した<sup>1</sup>。幕末からの日本の近代史を国際的覇権抗争史の中に位置づけ、100年続いた戦争の過程として論じた。林の提起した史観は、論点の違いや是非はともかく一定の訴求力をもった<sup>2</sup>。ここでは、そうした戦後の流れについては論じない。ただ、「東亜百年戦争」という発想のきっかけが、戦前発表の歴史小説『青年』にあったことに注目する。ただし、それは初めから見通されていたのではない<sup>3</sup>。神谷忠孝(2000)が指摘したように、1930年代のプロレタリア文学派の解消、『文学界』創刊、「文芸復興」から戦時下にいる「時代の転換期に林房雄が大きくかかわっている」。本稿は、その時期に書かれた『青年』の分析を中心に、1930年代の林がどのような文学観にたち、どのような題材を、いかに表象したかを跡付ける。戦後まで続く林の近代史観の発生過程を問うことは、そ

れを批判的に検討するためにも必要な課題である。

『青年』に関する先行論のうち、菅原潤<sup>4</sup>とケヴィン・M・ドーク<sup>5</sup>が本稿の主要な論点にかかわる。菅原は、転向前後に一貫する林の論理に着目した。芸術大衆化論における遅れた大衆と進歩性の関係は、『青年』における尊皇・攘夷と倒幕・開国の逆説的な関係と同型的であるとする。それは朝鮮と日本に対する林の理解(可能性)にも当てはまるとした。芸術大衆化論(「政治と文学」論)は林の文学観を理解するうえで重要な背景である。本稿では林の文学論と小説を具体的に取り上げて検討したい。一方ドークは『青年』が「歴史を文学に従属」させ、「[[全体]の回復を目指す歴史的苦闘を提示」した小説だとする。そして「志道聞多や伊藤俊輔のような愛国主義者は、国民的統一という当面の理想のために、攘夷という究極の理想を犠牲にしなければならなかった。それ故に生じた深い諦念と未完の仕事への無念の思いこそが、『青年』に統一されたテーマを与え」たと指摘した。『青年』は「開

国」を前景化した。だが、その後「勤皇」と「攘夷」を前景化した『西郷隆盛』、『興亜の復興』としての「満州」表象へ対象をシフトする。林の史観には、抑圧されたものの回帰として捉える発想がある。

以下本稿では、プロレタリア文学派だった林が『青年』を契機に、階級社会論に変わって国際的覇権抗争のなかの日本という近代史へ、準拠する社会観を転換する脈絡を明らかにする。

## 2 1930年代における林房雄の「政治と文学」論

林は、マルクス主義の理論家・福本和夫の出現による衝撃から理論家であることを断念し、1925年ころから文学評論と創作をはじめ<sup>6</sup>。当時のプロレタリア文学派にとって、前衛としての知識人・文学者と大衆との関係は重要な課題だった。いわゆる「政治と文学」論の論点となる。大衆を正しい社会認識と変革へ導くためには教化が必要で、そのためにはまず大衆に読まれなければならない。が、大衆が読むのは『キング』や『講談倶楽部』に掲載される記事・作品のように、分かりやすく楽しい読み物である。そこで林は「大衆文学の形式」に学ぶべきだと主張した。「大衆文学の形式を学ぶ最も簡単な方法」は「現実の労農大衆に愛読されてゐる吾々以外の作家——白井喬二や大佛次郎や三上於菟吉の作品を研究することだ」。文学青年にしか読まれないのでは本来の目的を達せられない。「大衆の感情と思想と意志とを結合し、それを、高め得るためには、何よりも先づ現実の大衆に読まれなければならない！」という（『プロレタリア大衆文学の問題』、『都会の論理』中央公論、29年12月）。この論議は、1930年7月、日本プロレタリア作家同盟中央委員会「芸術大衆化に関する決議」（『戦旗』）に方針が示され結着する。芸術大衆化の目的は「広汎な労働者及び農民大衆の中に、この革命的イデオロギーを浸透せしめること」であるが、「大衆の意識水準に追従して、イデオロギーをうすめ、何等かの日和見主義的な、或は自由主義的なイデオロギーを以て代用させてはならない」とした。これは林の見解を批判し斥けるものだった<sup>7</sup>。林には「文学」を読者との関係で捉える発想が根柢にある。それが「プロレタリア・ルネッサンス」や「文芸復興」の提唱につながった。それは横光利一「純粹小説論」（『改造』1935年4月）にも共有された。さらに戦後は「中間小説」という呼称を導くことにもなる（瀬沼1977）。林の文学的営為の底流である。

林は1926年の京都学連事件で治安維持法違反による最初の逮捕者の一人となった。裁判で刑が確定し、

「芸術大衆化に関する決議」が出された1930年7月から32年4月まで入獄した。この時期の社会状況に目を向ければ、入獄直前には、協調外交の成果としてロンドン海軍軍縮会議（30年4月）、日中関税協定（30年5月）がある。しかし、入獄中には、満洲事変（31年9月）、満洲国建国（32年1月）が起こる。そして、出獄直後には五・一五事件（32年）が起きた。この時期の日本の軍事・外交政策は、対ソ対米が軍事上の仮想敵に想定されつつも、現実的な外交政策においては経済関係の重要性から対英米協調が必須とされた。だが、満蒙問題をめぐって政府方針と現地軍との足並みがそろわず満洲事変が突発し、国際連盟を通じた協調的多国間外交との相反する二面性を抱え、国際連盟の脱退表明（33年3月）にいたる。1937年以降、日中戦争が拡大し、英米ソの覇権に対する批判的な世論が高まる。こうした状況から「教養主義的ポピュリスト」近衛文麿内閣（筒井2009）において「東亜新秩序建設」声明（38年）が出される。井上寿一（2011：6）は「一九三〇年代の日本の選択は、意図とは異なる、正反対の結果をもたらした」という。「協調と平和を意図しながら、結果は対立と戦争に到る。経済的な自由主義（自由貿易）の追求が自給自足圏（保護貿易）の確立となる。親英米＝反独伊の外交路線は反英米＝親独伊の外交路線に変質する。二大政党制の崩壊後、新しい政党政治の枠組みを作ろうとしたはずなのに、成立したのは大政翼賛会だった」。こうした国内外の状況と平行して思想弾圧が強まり、多くの検挙者が出た。『青年』発表（1932年8月～34年3月）前後は、現実に対する理想の挫折、新たな方向性への夢と知的な模索が交錯した時期にあたる。

林が出獄した1932年、コミンテルンから32年テーゼが出され政治的先鋭化が求められた。プロレタリア文学派は、外部からは弾圧強化、内部では「唯物弁証法的創作方法」「主題の積極性」を指針に作家・作品への批判があり、閉塞感をもたらしていた<sup>8</sup>。そうしたなかに出獄した林は、「文学」においてこそ現実を変革する「政治」の理想を示しようと、「作家のために」（『東京朝日新聞』32年5月19～20日）、「文学のために」（『改造』32年7月）、「作家として」（『新潮』32年9月）などで主張した<sup>9</sup>。こうした林の見解や作品は潜行中の小林多喜二から「右翼的偏向」と指弾された。林の見解を「作家として」で確認してみよう。

「ぼくは心をきめた。ぼくは文学のために一生をかける」とはじまる。ただし、「政治」と切り離れた意味での「文学」の選択ではない。政治と文学の関係について次のように述べる。まず「作家」と「記者」を区別し、それを「溶鉱炉」と「トラック」の関係に喩

える。「もえてゐる溶鉱炉があり、うごいてゐるトラックがある。トラックは鉱石をはこび、溶鉱炉は鉱石をとかす。「トラックが記者であり、溶鉱炉が作家であり、鉱石とは人生、純金とは本質性でありリアリティである」。そして蔵原惟人（谷本清）「芸術的方法についての感想」（『ナップ』31年9、10月）中のベリンスキーの引用、すなわち「現実が芸術家をひきまはすのでなくて、芸術家が現実の中に自己の理想をみちびき入れ、それにしたがって現実を改造するのである」などを引き次のように述べる。「文学は政治（すなわち階級の総体的利害）に従属せねばならぬ。」といふただしくまちがひのないことばを、きはめて小児的に理解して、「文学か政治か」などとみじめにぐらつくことによつて、ひどくこつけない政治的誤謬におちいつたのである。ぼくは溶鉱炉を敵の手にわたして、トラックにのつて逃げだしたのである。「記者」（＝トラック）ではなく、「作家」（＝溶鉱炉）であること。その意味で「文学に一生をかける」という。ここで林は、大衆化論争のときのように、大衆文学にならえと言うのではない。だが、「階級の総体的利害」のための「文学」とは言つても、党派の方針に従うことと同義ではないとの含みがある。「まがりくねりながら、そろそろとプロレタリアートの側にちかづいてゆく、インテリゲンチヤのプロレタリアの文学運動がつまいた。それとならんで、出版資本家の活動によつて「大衆文芸」のめざましく俗悪な進出があつた。」「そのあひだにはさまれて、たえず黄色い汁や青い汁をはきだしてゐる「純文学」なるものもある」。それに対し、「日本のルネッサンス」は「プロレタリア・ルネッサンス」であるはずだというのが自分の「夢」だという。

こうしたエッセイや『青年』を發表し始める<sup>10</sup>と、小林はいち早く「同志林房雄」を批判した。プロレタリア文学派の方針に対する徑庭を確認するために、批判の内実を確認しておく。当時のプロレタリア文学派（ナップ）では「主題の積極性」「政治の優位性」を方針とした。「右翼的偏向の諸問題」（『プロレタリア文学』32年12月）で小林は、「主題の積極性」とは「現実の階級闘争の広汎な政治的任務に創作的活動の主題を従属させ、全体として文学活動が政治闘争の補助的任務を果たす」ことだと確認し、これに照らして林の発言と作品は「非政治主義・文化主義」「右翼的偏向」だと批判した。同様に、『青年』を批判しながらも半ば肯定した亀井勝一郎「同志林房雄の近業について」（『プロレタリア文学』32年10月）に対し、「彼の全感想を通じて、たつた一言も主題の積極性あるひは政治の優位性についての理解が示されてゐない」という。「明確な階級的・レーニンの規定を含まない文学の主

張は、当然右翼にその道を開く」にもかかわらず、「同志亀井は、この危険な偏向に「同意」してゐる」と批判した。そして、林の『夜明け前』評価（「文学のために」）と『青年』を批判。林は『夜明け前』を「日本のプロレタリア文学運動に正しい適応を示そうとした」とし、「叢の中から」の視座で階級なき社会への「夜明け前」を描こうとしていると評価した。しかし、小林はそれも不十分だとし「明治維新の歴史を正しく振りかへることによつて、現在のプロレタリアートの任務を歴史的に確証づけ」なければならないという。『青年』については次のように批判した。「この作品は「人をつかむ」否、「青年をつかむ理想」・理想につかまれる青年についての「会話」の作品であつて、明治維新はたゞその背景に、「さしみのつま」に使はれてゐるに過ぎない」。明治維新は交換可能な背景でしかなく、血盟団事件（32年）であつてもよいようにしか描かれていない。絶対王政に向かつて歴史的制約性が事実在即して書かれておらず、農民と商業＝金貨資本が武士・諸侯とどう結びあい、格闘したかが示されていない。『青年』は人間を抽象的で孤立的な個人としてしか把握しておらず、歴史的制約性や経済社会機構、社会階級の観点から把握できていないとした。

以上のような林批判は、当時の党派方針に立脚するかぎりにおいて明確で鋭い。逆に言えば、林はそこから自由に発想したところで、「近代」化の起源に「日本」を発見した。先に触れたように、林は「作家として」で、「プロレタリア・ルネッサンス」の「夢」を述べた。曾根博義（1988）が指摘したように、33年2月の小林多喜二の死後、6月の佐野・鍋山の転向声明、9月の徳永直「創作方法上の新転換」（『中央公論』）を経るなか、林は『文学界』を創刊（33年10月）、『青年』を完成させ、「〈文芸復興〉の夢」に向かう。

小林の林批判にあつたように、『青年』が構想<sup>11</sup>、發表された時期に、島崎藤村『夜明け前』が連載されていた<sup>12</sup>。マイケル・ボーダッシュ（2000）は、マルクス主義からナショナリズムへの転向のなかで『夜明け前』が転向の論理を与えたと指摘した。林も『夜明け前』に触発された。『青年』は次のように林がいう「浪漫主義」への転回の契機となつた。

二度目の入獄後のエッセイを集めた『浪漫主義のために』（文学界出版部、36年7月）のなかで、林は盛んに「浪漫主義」を唱える。「浪漫主義者の夢—リアリズムよ、さようなら！—」で次のような文学史観を述べた。「自然主義の発生」は、「日本商人社会の一応の確立」「資本主義」化と同時である。一方で「資本主義社会」を理想とし「封建的」なものを破壊するとともに、そこであらわになる「人間の諸性質」の暗面

を批判的に描いた。その後「資本主義社会が動揺と破綻を示しはじめると共に」「人間の高貴性」を見出したのがプロレタリア文学という「浪漫主義運動」だった。が、未だ「リアリズム」にとらわれていた。今こそ、真に「浪漫精神」にあふれた文学運動が現われるべきときだという。ここでいう「リアリズム」と「浪漫精神」の差異は、先の「記者」と「作家」の差異に相当する。そこには「政治」の理想を示すのが「文学」であるとの文学観がある。林はこのように史的文脈で「自然主義」「プロレタリア文学」「浪漫精神」の関係をとらえた。林のいう「プロレタリア文学」から「浪漫精神」への転回は、大衆と進歩性との差違を包摂した社会像（「政治」の理想）を提示する領域として「文学」を意義づけることだった。

注意しておきたいのは、30年代の林は自らの立場と観点を、日本浪漫派のように近代以前・古典に遡った文化的伝統に根拠づけるようすがほとんどないことである。『青年』は19世紀の幕末に材をとり、日本の近代化が欧米との接触のなかで生成した社会像を提示したが、この時点では「勤皇」も「攘夷」も後景化していることである。

林には、明治維新、民権運動から社会主義運動の勃興にいたる史的な流れを通じて現在を認識する見方があった。「歴史の発掘」（『都会の論理』中央公論社、29年12月）で林は、歴史小説の可能性を述べていた。歴史のなかには「革命的価値を有し、現代人を鼓舞し、真理への眼をひらき得る事件」が多くある。「パリ・コミュン、一九〇五年、一九一七年等々はいはずもがな、わが国の歴史における数多の農民一揆、明治革命、自由党時代、保条令前後、社会主義運動史における各モメント」。「プロレタリア作家は、この埋もれたる歴史をその歴史的現実性において発掘しなければならぬ」と述べていた。『青年』と『壮年』『晩年』の構想は、そうした歴史の小説化だったと言えよう。ただし、それが「プロレタリア作家」から脱皮する契機となった。

のちに林は改稿した決定版『青年』（第一書房、38年10月）<sup>13</sup>の跋文でこう述べた。「『青年』の主題は「日本の再発見」であり、「日本の自覚」であつた。「マルクス主義は既に我々日本人にとって、過去の思想体系に過ぎぬ」。「多くの思想が日本列島の岸を洗ひ、ある思想は海嘯の如く日本の全土をおほひつくすかのやうに見えた。だが、波は日本を洗つて、その秀麗さを増すことにのみ役立った」。「『青年』の主題はこの強靱なる日本の本質を探ることであつた」。幕末以来の近代化という歴史的な脈から見出された「日本の再発見」という『青年』の意義づけが追補された。しかし、

時流迎合である前に、理想と現実認識との間に折り合いをつける社会像の追求によって幕末以来の近代史を描きだしていたのだった。その内実を『青年』で検討したい。

### 3 近代化の歴史的起源の物語—『青年』

『青年』<sup>14</sup>は、元治元（1864）年6月（物語内の年月日は旧暦、以下同様）、イギリスから急遽帰国し「ポルトガル人」に変装した伊藤俊輔と志道（井上）間多が横浜の居留地に現れるところから始まる。この年7月19日、蛤御門の変（禁門の変）を経て、8月5～7日の馬関戦争までの約2ヶ月という短い期間の物語である。物語の前年、文久3（1863）年には長州藩が米仏蘭商船を砲撃した下関事件があった。幕府の「開国」路線に対し、朝廷を奉じる長州藩は攘夷論が大勢を占めた。同年8月18日の政変（文久の政変）で、会津藩・薩摩藩を中心とする公武合体勢力が長州藩を京都から追い出した。一方、薩摩藩でも、この年7月、前年の生麦事件に端を発して薩英戦争が起きていた。青年・伊藤と志道は、そうした情勢の中で、幕府による開国とも、即時攘夷の藩論とも異なる立場に立ち、藩を「開国」論に説得して四国連合艦隊との間を調停しようと奔走する。調停は失敗し交戦するが、和議が成立し、伊藤がエルネスト・サトウを「日本で最初の西洋料理」で饗応する場面でおわる。

この短い期間を切り取ったことの意義は何だろうか。この時期は、長州藩が朝廷から遠ざけられるとともに幕府との対立が激化し、藩の立場を保証する権力との関係に危機が生じた時期である。そこに「開国」論を説く青年たちが配される。朝廷＝攘夷の立場が後景化されるとともに、「開国」が旧体制（幕府）を打破する正しい「理想」として前景化される。この「理想」は「反逆する精神」（第九章、p.175）によって逆説的に位置づけられる。プウラン医師が次のように語る場面がある。

「幕府の開国主義は、封建主義そのものゝ自己保存の見地から生れた、見せかけな進歩主義にすぎない。しかし、長州の排外主義は、一見反動的にみえても、底にあたらしい潮流をひそめてゐる。なるほど攘夷思想は、人民の無智と、外国貿易による古い経済関係の急速すぎる混乱によつてかもしだされた、それ自身としては不合理な思想感情です。その中には、旧制度日本の新制度ヨーロッパに対する盲目的反抗もふくまれてゐる。しかし、その底をつらぬいてゐる現状打破、幕府打倒とい

ふ根本方向を見のがしてはならない。しかも、長州には、すでにあの二人——志道と伊藤によつて代表される熱烈な開国主義の芽生えがある。かれらの存在は、長州の排外主義は根本において現状打破の急進主義であつて、それはある時期には、容易にたゞしい開国主義に転化することの可能をしめすものにほかならぬ、とわたしは考へる。いひかへれば、長州の現状打破的精神と、あの二人の青年によつて代表される、正しい国際認識の上になつた、真の開国主義とが結合するとき、日本の革命的潮流は、はじめて文明への方角をとるのだ。わたしが、二人の青年の努力に、きみたちからみれば、ふしぎに思へるほどの期待をかけてある理由はこの点にある。」(第十二章, p.217)

幕府の開国論が「自己保存の見地」から出たのに対し、「長州の排外主義」は「現状打破の急進主義」による。この「現状打破の急進主義」と「正しい国際認識の上になつた、真の開国主義」が結合するとき革命的潮流が動くにちがいないと語らせている。「文明」社会への変革(「真の開国主義」)を推し進めるのが、「無智」や「混乱」から生み出された「不合理な思想感情」「盲目的反抗」としての「攘夷思想」という逆接である。

これが、イギリス軍艦に乗り込むフランス系スイス人によつて語られていることに注意したい。「青年」たちの行動は、西洋人の視点、「作者」の視点から意義づけられる遠近法で描出されている。伊藤や志道のみならず、高杉やその他の脇役の日本人にも焦点化される。が、それらと拮抗するほどの多くを割いて、イギリス軍艦内部に焦点化される。「理想」の立場にある西洋人の会話場面と、幕府・朝廷との関係をめぐる長州藩内の議論とが平行に描かれる。会話場面に登場するのは、外交官エルネスト・サトウ、プウラン医師、プウランと対立するトレエシイ中尉、あるいはヨーロッパ文明に幻滅した写真師ピイトなどである。サトウは、外交文書が、表向きの意味と異なって自国の利益を計算した意味をもつことを承知している。伊藤と志道を軍艦で長州に届けるのも「青年たちの熱心さにごかされて万一の平和的解決を期待したといふよりは、さしせまつた海峡攻撃の準備のために防備を偵察し、また長州政府の意志をよりはつきりとたしかめることが目的である」(第三章, p.45)。トレエシイ中尉は、忠実なイギリス軍人であり力の論理による功利的な考え方をもつ。それに対し、プウラン医師は2人の青年にフランス七月革命の「民衆」を重ねみる。ドラクロアの絵を見せながらこういう。「かれらは、

おそらくまへの晩までは、たゞーばいの火酒と一片のパンをほしがつてゐた——かれらの全野心はたゞそれだけのものであつた、つまらない、けちな浮浪者にすぎなかつたかもしれ」ないが、「理想に心とからだをつかまれることによつて、民衆は、一夜のうちに、高貴な神聖な勇士になるのです」(第五章, p.77-78)といい、青年たちに「原高貴性」を見出す良き理解者という役回りである。プウランに対して、サトウやトレエシイ中尉、ピイトらが疑義を呈する多角的な会話が交わされる。長州藩内で奔走し出来事に内在する青年たちと、それに対する西洋人の批評的会話とが、平行に描かれ意味づけられる。

また、「作者」の評が挿入される。たとえば次の部分である。「作者は日本の国土の——日本人と自然の美しさを、心から愛してゐる。作者は、他の多くの仲間と共に、日本の「国法」の名において力を加へられつゝあるものゝ一人である。」「しかも確信をもつて、日本の国土への愛を宣言することができる。」「作者をして、この物語の筆をとらせたものは、すべての労働者と農民の胸に共通する、うつくしいものをうばはれたものかなしみ、うつくしいものをけがされたものいかりである。プロレタリアートの作家は、今こそ、秘められた絵巻の封印をきり、けがされた日本の人と自然の中から、しんじつに美しいものをほりだして、ほこりと確信とをもつて敵と味方の眼の前にくりひろげる。」<sup>15</sup>(第三章, p.40-43)。ここでは「労働者と農民」(「プロレタリアート」)の立場で「日本」が見出されているが、それはバロツサ号が瀬戸内海を通過する際、西洋人のまなざしでとらえた「日本」の風景描写と重ねられている。この事後的で鳥瞰的な「プロレタリアートの作者」視点は、外部的な視座の点で西洋人と重なりつつ、「日本の国土への愛」を表明する点では内在的な青年たちと重なる。

このように、物語世界内の出来事に内在的な青年たちの視座と、相対的に鳥瞰的な西洋人、「作者」の視座とが平行に、複眼的に語られる。青年たちの「原高貴性」について「歴史あるいは民族の本質を不可変的なものと措定」しているとする解釈(安田 1983: 91)はここではとらない。幕末の一時期に限定し、西洋の視点に拠ることで、むしろ「尊皇」イデオロギーは後景化していると言つていい。林がのちにいう「勤皇の心」から逆照射するのではなく、この作品に即して読む限り、限定された時期を対象とし、複眼的な視座のゆらぎのうちに「開国」の「理想」が位置づけられている。特定の短い歴史的場面を切り出し、欧米列強と日本との関係、幕府・朝廷と長州との関係、長州藩内の攘夷論と青年たちとの関係といった対立関係と

相関的に、青年たちの「開国」の「理想」は対立を超越する理念としての強度を増すように描かれる。青年たちは、攘夷の藩論に「反逆」しつつ、幕府や列強に対する弥縫的和議にも「反逆」するのである。

だが、青年たちをつかむ「開国」の「理想」は恒久的なものではない。それは、「終章」において、伊藤がサトウを招き「日本最初の西洋料理」で饗応する場面に現れる「ナイフ」に読み取ることができるだろう。

なにをつなぎあはせたのか、<sup>フイット</sup>七呎に四呎あまりの長方形のテーブルが純日本風の部屋の中に据ゑてあり、外国製らしい、織目のあらい淡黄色の、短い布がかけてある。その上に、支那製らしい模様のある四枚の大皿と、平つぺたい深皿と、おそろしく刃のするどいナイフ（その中の一本は、手裏剣といふ殺人用の武器であることがあとでわかつて、サトウのきもをつぶす）と、はげた真鍮の Spoon と、さらに、親切にも、一對の日本の箸がならべてある。醤油の瓶、飯をいれた塗物の器、粗い黄色の砂糖を盛つた小皿、そして、食卓の中央には、ガラスの花瓶にさした、これだけはまがひものでない白百合の花……………

〔中略〕

大きなまげを結つた女中たちが三人、あるものは、なにか貴重なものでもはこぶやうに、あるものは、不浄物から顔をそむけるやうな表情をして、料理をはこびはじめる。第一の皿は、ボイルしたハゼといふ魚である。サトウは、切らうとするが、フォークがない上に、ナイフの刃がおそろしくて、うまくゆかぬ。二本の箸をとりあげ、それを魚の頭につきさし、 Spoon で肉をけづりおとすことによつて、やつとこの大事業を完成する。(終章, p.678-680)

食器もそろわず、あり合わせで供給された和製「西洋料理」は、文明開化にむかう日本のありやうを表象する。「西洋料理」を模倣するために寄せ集められた様々な物。「大きなまげを結つた女中」たちの「なにか貴重なものでもはこぶ」ようでもあり「不浄物から顔をそむけるやうな表情」でもある両義性。そのなかに配された「白百合の花」。この花言葉は純潔・清浄・高貴で、青年たちの「原高貴性」を意味する。この描写は「開国」(西洋料理)が「理想につかまれた」青年たちの「原高貴性」によって成就することを暗示する。とともに、「おそろしく刃のするどいナイフ」を含む。ここには「西洋」への反逆の暗示を読み取れる。「理想」としての「開国」は、西洋の模倣である

もに、それをほみ出た危険な差異をとめない、抑圧された“攘夷”に向かうことを間接的に示していると読める。

『青年』における青年たちは、絶対性を帯びた“正しさ”よりも、現実との関係で「理想」を見出す。「攘夷」のためにイギリスに出かけた伊藤と志道は、ポルトガル人に扮装し、開国論に転向して帰ってくる。開国を理想とするのは、西洋に対抗できないという現状認識による。ここには、絶対化された“正しさ”への準拠はない。即時攘夷の非現実性、国内藩内の分裂という現状に対し、開国による西洋化という「理想」が現状を打破する相対的な正しさを帯びるのである。この「理想」は、現状(現実)と相関的に見出された、相対的な理想である。そうでありながら、当の現実を前にして、それ以外にないという絶対性を帯びる。こうした「理想」の性質を示すためにも、ごく短い歴史の一コマに限定して描いたことが効果的だった。

林には、この時期の亀井勝一郎や島木健作のように、 Kommunizmus の社会観に基づいた「政治」運動の“正しさ”と自己の関係をめぐる自意識の葛藤が欠けている<sup>16</sup>。島木は『癩』『盲目』において、理想像を能動的に見出しつつそれに従属する主体を形象化した。亀井勝一郎は、「党派への盲目的追従に由来する」「政治主義」に対して、「外部強制ではなく、まして命令でもなく、束縛でもない」「自発的意志」に基づき「理想」を憧憬する「政治」を対置した。これを亀井は「能動的主体の自意識」とよんだ(『芸術的気質としての政治慾』、『転形期の自我』ナウカ社、34年9月)。このような、“正しさ”の絶対性に対する疚しさを抱えた自意識の葛藤は林にはなかった。ただし、亀井の思考の展開に『青年』は大きな示唆を与えた。亀井は『青年』「前篇」発表当初、これを批判的に論じた(前掲「同志林房雄の近業について」)。しかし、『青年』が完結し、プロレタリア文学派が解消していく2年後には絶賛するようになる。亀井に与えた『青年』の示唆は、現実と理想との動的な関係の認識だった。「『青年』について」(『コギト』34年7月)で亀井は、「理想につかまれた青年」には「現実に深く徹したものの夢の夢」「リアリストなるが故にこそその夢」が示されているという。「現実」の社会関係のなかで見出される「夢」(「理想」)。「理想」が「現実」との相関関係のなかで見出されることの示唆だった。

#### 4 林の歴史小説の変質と「満洲」表象

最後に、『青年』以後の動向に触れておきたい。『青年』を始めとする連作は、伊藤博文の死までの明治期を対

象に、いわば「日本」の成長物語として構想された<sup>17</sup>。青年の「理想」は壮年老年と成長していく過程で相対化されることが予期されている。『青年』は、長州が列強・幕府と対立し、朝廷からも遠ざけられ孤立した断面で、国際関係—国民国家システムのなかに近代国家「日本」を位置づけること（「開国」）を「理想」とする青年を描いた。「理想」だった「開国」は不平等条約により西洋列強による疎外をとまなう。その疎外からの自己回復の物語として、国会開設期を題材とした『壮年』が描かれる。しかし、『壮年』は中絶し『晩年』は書かれない。

これに代わって林は『西郷隆盛』<sup>18</sup>を1939年から戦後へかけて発表した<sup>19</sup>。戦後1948年に第11巻を刊行して中断した。物語は『壮年』で描いた明治期ではなく、『青年』より前の幕末期に遡る。中断までの物語は、西郷が斉彬に取り立てられた時期から『青年』の冒頭と同じ1864（元治元）年に伊藤と井上が横浜にいる場面までである。当時の社会背景からみれば「伊藤博文から西郷隆盛への英雄シムボルの移動は、翼賛運動から大東亜戦争にかけての日本国家の動きに対応する林房雄の第二の転向を記念するもの」（鶴見2012：243）だったといえるが、時流迎合的「転向」より前に、国際的圧力への抵抗史として日本の近代を捉える史観が形成されていた。「開国」を理想とした青年伊藤から壮年伊藤へ進む過程で、「勤皇」を理想の核にすえた西郷像による幕末史の捉え直しに転化した。『青年』と『西郷隆盛』との大きな違いは、西洋人の視点の欠如である。開明的な視点は藩侯斉彬や藤田東湖、橋本左内などが担う。西郷は開明的な側面と「勤皇」志士の側面から描かれる。「開国」は「理想」として位置づけられず、むしろ水戸の国学に依拠した攘夷派志士との関係が前景化される。それは、「近代の超克」座談会（『文学界』42年9、10月）に林が提出した「勤皇の心」で、西郷の家系を勤皇の血統として位置づけた論脈につながった<sup>20</sup>。一方、維新後の西郷は征韓論者でもあった。興亜の理想は、明治維新に起因する開国による攘夷として意義づけられた<sup>21</sup>。ここにおいて、林の近代史観は満洲ものの小説につながる。

林は日本の近代化という歴史的＝現実的文脈を発見し、『青年』『壮年』から『西郷隆盛』へ転換するなかで「勤皇の心」という「大義」<sup>22</sup>に逢着した。そして、欧米列強に抗する東アジアという対立的社会像から、興亜の理想として「満洲」を位置づけた。

林は1938年に2ヶ月ほど満洲を旅し、「新しき土—満洲紀行—」（『文芸』39年5月、『亜細亜の旅人』金星堂、1940年2月）を発表した<sup>23</sup>。この紀行文で林は、

満洲を「広漠」として「歴史と伝統が浅い。文化がない。すべてが未来に属する。」国であるという。そして、「明治維新以来七十年の東亜に於ける日本人の苦闘、苦しい戦を見事に戦ひ抜いた魂が、そこに埋つてゐる」「忠霊塔の国」であるとみる。「忠霊塔の下に埋つてゐるもの」は「興亜の魂」である。

東洋の復活は明治維新に始まつてゐる。東海の孤島日本が西力の東漸より己れを護り得て、自己を革新した明治維新が、東亜復興の開始であることは、今日ではすでに常識であらう。

〔中略〕

日露戦役に辛うじて勝つたことによつて、東亜復興の第二の基石が置かれた。

その後、何ごともしらさず、日本は対外的には一路平安の道をたどり、却つて国内の相克に悩むといふ状態であつたが、国内の偷安をよそに、明治維新の精神を忘れず、興亜の使命を忘れず、日露戦役の苦闘を忘れず、満洲に於て、北支に於て、コツコツと地下道を掘つてゐる日本人があつた。この坑道に装置された火薬がつひに爆発したのが満洲事変であり、満洲国の成立によつて、こゝに興亜第三の基石が置かれたのである。（第四の基石を置かんための苦闘は、こゝに言ふまでもなく、現在戦はれつゝある日支戦である。）

このエッセイの特徴は、「西力の東漸」という国際抗争史、林の史観の枠組みによつて「満洲国」の見聞を意義づけた点にある<sup>24</sup>。

林は満洲を舞台とする小説も書いた。その最初が『大陸の花嫁』（第一書房、39年4月）である<sup>25</sup>。ある漁村の地域振興問題にからんだ家同士の対立から引き裂かれた男女青年の恋愛を軸に、その確執が曲折を経て満洲開拓地での新生活にいたり大団円となるまでを描く。このほか、匪賊の宣撫工作をめぐる親日派満洲人やソ連のスパイとの駆け引き、青少年義勇軍の戦闘などを含む冒険小説的な『東洋の満月』<sup>26</sup>（時代社、41年3月）、満洲事変に先立つ1928年の張作霖爆破事件前後における満洲青年議会、満洲青年同盟設立をモデルとした『青年の国』（文藝春秋社、42年12月）などがある。これらのなかで「満洲」は、「青年」たちの「興亜の理想」を実現する場として描かれた。

1930年代の林房雄は、世界的な資本主義の行き詰まりがもたらした経済不況・社会不安・戦争という閉塞感のなかで、時代の動向と大衆的な欲求に応えうる社会像を表象しようとした。マルクス主義の階級社会論に依拠したプロレタリア文学から出発しながら、国

際的な覇権抗争のなかで近代化した「日本」の自立を主題とする歴史表象に向かい『青年』『壮年』を発表した。そして、日中戦・総動員体制にいたり、幕末史の再解釈として「勤皇」の志士西郷隆盛という形象へ転換し、興亜の理想を意義づけた。林のテキスト群は平明・通俗な表象だった。しかし、鋭敏に同時代の議論に承接しながら社会の欲求に形象と論理を与えたのだといえる。

## 注

- 1 初出は『中央公論』（1963年9月～65年6月）。単行本は二冊で番町書房刊（正編1964年8月、続編65年6月）。
- 2 林房雄を戦後に評価したのは三島由紀夫「林房雄論」（『新潮』1963年2月）だった。これは『大東亜戦争肯定論』発表より早い。その後、林との対談集『対話・日本人論』（番町書房、1966年10月）がある。が、幕末から太平洋戦争までの国際的圧力への抵抗としての100年戦争だとみる林に対して、三島は大衆化による社会変容の方を重視しており、そこには認識のずれがある（山崎2015）。林が『大東亜戦争肯定論』で期待を寄せて論及したのは、西尾幹二「私の「戦後」観」（『自由』1965年2月）、江藤淳「日本文学と「私」」（『新潮』1965年3月）だった。その後、富岡幸一郎『新大東亜戦争肯定論』（飛鳥新社、2006年8月）などがある。
- 3 林は『大東亜戦争肯定論』で次のように述べた。「その時（引用者注、『青年』を書いた時）には、この戦争（引用者注、馬関戦争）が「東亜百年戦争」の一部であることには気がつかなかった。三十歳になったばかりの私は、みずからマルクス主義をもって任じていて、明治維新の分析にも「マルクスの方法」を用いると初版の中に書きこんだくらいだから、ロンドン帰りの志道閑多、伊藤俊輔に代表される「開国派」が本質において「攘夷派」であったことを見落した」（前掲注1、正編p.50-51）。
- 4 菅原潤（2011）「第三部 第一章 林房雄の「進歩性」」
- 5 ドーク、ケヴィン・M（1999）「第5章 同一性に基づく文化の創出」
- 6 林房雄『文学的回想』（新潮社、1955年2月）p.18-22
- 7 芸術大衆化論については、林淑美（1988）を参照。
- 8 この時期の日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の混迷と危機については、山田清三郎（1970）を参照。
- 9 副田賢一（2016）は1930年代の林の諸作を〈獄中〉表象という系譜の文化的記号性の観点から論じた。副田と本稿の観点の違いは、林の文学観や近代史観は戦後にまで継続し、〈獄中〉表象という枠組みだけでは評価できないとみるところにある。
- 10 1932年12月までに発表されたのは「前篇」で、中央公論社版の「第十四章」までにあたる。
- 11 林房雄『獄中記』（創元社、1940年2月）の「五月十七日」（1931年）の項。「青年」と題する大作の着想を得た。これは掛値なしの大作である。うまくいつたら藤村の「夜明け前」の墨を摩しかねない。まづ出来あがるのは「青年」であるが、当然これは「壮年」「老年」と三部作に発展

する。」（p.59）

- 12 初出は『中央公論』で、第一部が1929年4月～32年1月、第二部が1932年4月～35年10月。単行本は新潮社刊（1935年11月）。
- 13 内藤由直（2009）は初出から中央公論社版を経て決定版『青年』に至る改稿過程で、マルクス主義的な資本主義発達史観、インターナショナリズムへの暗示が払拭されたと論じている。
- 14 以下引用は最初の単行本『青年』（中央公論社、1934年3月）による。
- 15 この部分は雑誌初出から中央公論社版刊行に際して大幅削除。そこには、マルクスが「国家と国土」の差異を強調したことを述べ、「労働者と農民の胸にあふれてゐる、うつくしい日本へのあこがれは、しばしば××者の奸悪な目的のために利用された」とし、「ファッシズム」への批判が語られていた。
- 16 島木健作と亀井勝一郎については、山崎（1998）で論じた。
- 17 『壮年』（第一書房1936年2月）、『壮年 第二部』（第一書房1940年9月）。「『壮年』第一部の後書」に次のようにある。（引用中の／は改行）。「『青年』の年代は、文久三年と元治元年であつた。「壮年」は明治十四年より二十三年に至る。即ち伊藤博文の参事院議長就任、自由党の結成、福島事件、鹿鳴館時代、保安条令、憲法発布を含む年代である。「壮年」は三部に分れ、第一部はこの巻、第二部は「福島事件」、第三部は「鹿鳴館時代」と傍題されることになつてゐる。「晩年」は日露戦争、朝鮮併合、伊藤博文暗殺等の事件を含み、即ち明治の「晩年」を描く。／全篇の主人公は、伊藤博文の如く見えて、実は日本そのものである。だが伊藤博文の生涯は、その晩年に至るまで「明治の精神」によつて貫かれてゐた。明治を描くにあつて、伊藤博文の姿が正面に現れてくるのは決して偶然ではない。／明治といふ壮大にして不可思議な時代を描くことは、また現在より将来にかけての日本の姿を予見することになる。」
- 18 1940～48年に第1～11巻を創元社より刊行。その後、1965～70年に第12～22巻を徳間書店より刊行。
- 19 後年、林は『西郷隆盛』の最終巻「第二十二巻城山の巻」（徳間書店、1970年12月）のあとがきで次のように述べた。『壮年』執筆中「伊藤博文に「維新と明治の精神」を代表させることはできない。ほかに誰かがいたはずだ」と考え、「命をかけながら運命によって幾度か死をまぬがれ」、死んだ同志を思って「清節と理想を堅持し」、「国の危機に臨めば必ず回想されて日本国民を鼓舞する西郷隆盛という不可思議な人物」を見出したという。
- 20 座談会「文化総合会議 近代の超克」に提出した「勤皇の心」（『文学界』1942年10月）。これより前『西郷隆盛第五巻月魄の巻』（創元社、1941年9月）の本文・あとがきにも言及がある。
- 21 征韓論については「漢訳南洲遺訓」（『勤皇の心』創元社、1943年4月）で言及している。
- 22 1940年の近衛内閣で推進された新体制運動とマルクス主義の関係について、林は「転向に就いて」（『文学界』1941年3月、引用は『勤皇の心』）で次のように述べた。

「マルクス主義は決して日本人の永遠の心の支柱となり得るものではない。十九世紀の西洋の階級社会に発生した一つの理論的独断にすぎない。それは一つの主義であるかもしれないが、人をして喜んで死なしめる大義ではない」。一方で林は、マルクス主義と新体制運動との類似性を指摘し、「我々転向者は新体制運動のために、用ひ易い、さしあたり便利な性質を色々と持つてゐる」とし、「自由主義の敵」という「思考の形式」、「革新運動」としての「熱情の方向」、「生活の規律と訓練」、「組織」を作り上げる「才能」をあげた。

- 23 「新しい土」という題名は、このエッセイ内でも言及しているように満洲を舞台とした1937年公開の日独合作映画「新しき土」（アーノルト・ファンク、伊丹万作の共同監督）を意識したものである。
- 24 この旅は文藝春秋からの派遣で小林秀雄とも現地同道した。小林には「満洲の印象」（『改造』39年1、2月）があり、島木健作は「小林秀雄の旅行記」（『文学界』1940年8月）で、「彼の旅行記の特質」が表れているとし、「ものを見る眼と、考へる頭脳との見事な統一」があると評した。島木には『満洲紀行』（創元社、1940年4月）があるが、満洲開拓民の生活実態のルポルタージュで、林の紀行文とは対蹠的なものである。
- 25 初出は『読売新聞』1938年9月20日～39年2月20日。浦田（2004）は、湯浅克衛『先駆移民』（新潮社、1939）と比較し「この、移民団に見られる人間の苦悩や心情の揺れ動きという現実の人間の描写に比べて、「大陸の花嫁」は、現地の現実・人間の現実はどれほど描写されていない」と指摘した。
- 26 「あとがき」で林は、「青少年のための満洲案内」のつもりで書いたと記している。

#### 参考文献

- 井上寿一（2011）『戦前のグローバリズム 一九三〇年代の教訓』新潮社
- 浦田義和（2004）「林房雄『大陸の花嫁』解説」、『「帝国」

- 戦争と文学6 大陸の花嫁』ゆまに書房
- 神谷忠孝（2000）「林房雄研究の一九三〇年代」（文学思想懇話会編『近代の夢と知性 文学・思想の昭和十年前後（1925～1945）』翰林書房
- 瀬沼茂樹（1977）「中間小説」、『日本近代文学事典 第4巻』講談社
- 菅原潤（2011）『「近代の超克」再考』晃洋書房
- 副田賢一（2016）『〈獄中〉の文学史』笠間書院、第五章
- 曾根博義（1988）「〈文芸復興〉という夢」、『講座昭和文学史 第二巻』有精堂出版
- ドーク、ケヴィン・M（1999）『日本浪漫派とナショナリズム』柏書房、小林宜子訳
- 筒井清忠（2009）『近衛文麿 教養主義的ポピュリストの悲劇』岩波書店
- 鶴見俊輔（2012）「後期新人会員—林房雄・大宅壮一」、『共同研究 転向1—戦前篇上』平凡社
- 富岡幸一郎（2006）『新大東亜戦争肯定論』飛鳥新社
- 内藤由直（2009）「林房雄『青年』における本文異同の戦略—国民文学への道—」、『日本近代文学』80
- ボーダッシュ、マイケル（2000）「転向と近代日本文学史という物語の成立—昭和十年前後における島崎藤村の再評価」、前掲『近代の夢と知性』
- 安永武人（1983）「II文学の転向 林房雄『青年』」、『戦時下の作家と作品』未来社
- 山崎義光（1998）「島木健作『癩』『盲目』と亀井勝一郎の初期評論」、『日本文芸論叢』
- 山崎義光（2015）「（三島由紀夫作品を読むための事典）天皇、政治と文学」、有元伸子・久保田裕子編『21世紀の三島由紀夫』翰林書房
- 山田清三郎（1970）「VIコップ時代・ナルプ解体へ（一九三一一—一九三四）」、『増補改訂版 プロレタリア文学史 下巻』理論社
- 林淑美（1988）「芸術大衆化論争における大衆」、『講座昭和文学史 第一巻』有精堂出版